

聖地巡礼ファイル #250

# 古都に隠された十字架(前編)

古都に隠された十字架(前編)

京都・太秦

百瀬直也

## 古代イスラエルと日本

2002 年 4 月 26 日、金曜日

ゴールデンウィークは仕事が入って休みを取れないかと思っていたが、カレンダー通りに休めそうなので、真由美と二人でどこへ行こうかということになった。

さっそく、マップダウジングをやってみた。

ダウジング用の水晶のペンダントを日本地図の上にかざし、「世界の平和のために役に立てるために、どこへ行くべきでしょうか？」と念じる。

振り子が振れる方向に定規を置き、次に位置をずらして別の直線ができるところとの交点を求める。

出たところは、天橋立だった。

その 1 ヶ月ほど前、師と仰ぐ本山博先生の本を読んでいて、応神天皇の時代にユダヤ人が渡来してきたという記述に目が止まった。

「応神天皇の頃、ユダヤの一族で、だんだん日本の方へ流れてきた人達」がいたというのだ。

これがもし本当ならば、大変なことだろう。

ユダヤ人が古代の日本を訪れたなんて、歴史の本のどこにも書かれていない。

本山先生は超心理学や気の科学の研究では世界的に知られた科学者だが、歴史学者ではな

いので、こういうことを研究されたりはしないだろう。

では自分でやるしかないか。

それ以来、古代日本とイスラエルの関係が気になり始めていた。

仕事でイスラエル製の某システムを扱っていて、いままでイスラエルへは 4 回ほど行ったことがある。

自分にとって、イスラエルとユダヤ人には、ただならぬ縁がありそうだ。

かつて過去生でイスラエルの地にいたのかもしれないと思う。

イエス生誕の地ベツレヘムの山肌を車窓から眺めながら、強くそう想ったものだった。

## 秦氏はユダヤ人？

調べていくうちに、応神天皇の時代、つまり 4 世紀の終わりから 5 世紀の始め頃に渡来したユダヤ人とは、古代の渡来氏族である秦氏(はたうじ)ではないかと思うようになった。

平安時代初期の 815 年に編纂された『新選姓氏録』には、仲哀天皇の時代(4 世紀後半)に、「弓月(ゆづき)」の王、巧満が日本の朝廷を公式訪問したとある。

弓月は中国読みでクンユエ(Kung-Yueh)といい、中国の史書にも現れる。

中央アジアのバルハシ湖の南あたりにあった国だった。

応神天皇の第 14 年(一説には西暦 372 年)には、巧満王の子の融通王が 18,670 人の民を率いて渡来し、帰化したという。

この弓月の民が秦氏の祖先だったらしい。

さらに、秦氏は自分たちを秦の始皇帝の子孫だとも称していたが、これはそのまま受け取るわけにはいかない。

渡来民たちがこの国での社会的地位を上げるために、自分たちの出自を脚色するというのは世の常だったからだ。

だが、考古学者の森浩一によると、秦国の時代に行われた治水工事のひとつ「都江堰」と、秦氏が一族をあげて取り組んだ「葛野の大堰」は、構造的に共通点があるという。

秦氏の故郷は、通説どおりの朝鮮半島なのか、それとも中国なのか、中央アジアなのか。

または、それらは一時的な居留の場所でしかなく、じつははるか西方のパレスティナからやってきたのか。

いずれにしても、秦氏は当時の日本に高度な技術をもたらし、農耕、土木、養蚕、機織り、酒造などを伝え、日本の文化に大きく貢献した。

そうした秦氏たちの貢献は、日本史ではあまりにも過小評価されている。

秦氏たちの祖先は、かつてイスラエルを追われてシルクロードを東へ進み、中央アジアの片隅に住み着いた「失われた十部族」の末裔だったという説が根強くある。

もちろん、アカデミズムではなく、いわゆる異端歴史家やアマチュア歴史愛好家たちの間で、である。

十部族について書く前に、ここでユダヤ人の歴史を簡単に説明しておいた方が良さだろう。3000 年以上前に、ユダヤ人たちはエジプトで奴隷生活を送っていた。

BC1290 年頃に、彼らはモーゼに率いられてエジプトを脱出する。

BC1020 年にはダビデ王がパレスティナの地にヘブライ人の王国を建設し、エルサレムを首都とした。

ヘブライ王国は次のソロモン王の時に最盛期を迎えるが、BC922 年頃、イスラエル 10 支族から成る北朝イスラエル王国と、2 支族から成る南朝ユダ王国に分裂した。

その後 BC8 世紀に、イスラエル王国はアッシリアの侵攻によって滅ぼされた。

イスラエルの 12 支族のうち、離散した北朝イスラエル王国の 10 支族が『失われた十部族』と呼ばれ、彼らがどこへ消えたのかが、いまだに謎となっている。

一説には、秦氏の一族は、中国で景教と呼ばれていた東方キリスト教（ネストリウス派）を信仰していたといわれる。

秦氏が景教を日本にもたらしたため、日本の仏教や神道は景教の強い影響を受けたという。その秦氏がユダヤ人だったのではないかという説を説く人々がいる。

まずここで、『ユダヤ人』の言葉の定義をはっきりさせておきたい。

狭義の『ユダヤ人』は、古代の南朝ユダ王国の人々とその子孫のことだ。

一般に、現在イスラエルに住む人々や、世界のその他の地域に住む人々をユダヤ人と呼ぶのは、彼らが南朝ユダ王国の子孫であると思われるためだ。

古代の北朝イスラエル王国の十部族の末裔は、ユダヤ人ではなく『イスラエル人』と呼ぶ方が本来は適切かもしれない。

だが普通に「イスラエル人」といえば、現在のイスラエル国家と混同されるので、以降は「イスラエル十部族」というような呼び方をする。

ちなみに現代のユダヤ人の定義は、イスラエルで定めた『帰還法』によれば、「ユダヤ人の母親から生まれた者あるいはユダヤ教に改宗した者で、他の宗教に帰依していない人」とされている。

つまり、ユダヤ人の血が入っていなくても、ユダヤ教を信仰していればユダヤ人と呼ばれるのだ。

## 失われた十支族

ユダヤ人が日本に渡来したといっても、巷でいうところの『日猶同祖論（にちゆうどうそろん）』、つまり日本人とユダヤ人が同族だったという説を真に受けているわけではない。

だいたい、モンゴロイドである日本人のすべてがセム語族であるユダヤ人の末裔であるわけではないから、この名称自体がおかしい。

こういうことをネタにした本には、不確かな情報をもとにして勝手な理論を展開した「トンデモ本」が多い。

日本人のルーツを探る近年の科学的研究を取り入れた研究成果からすると、太古の日本の先住民である縄文人は現代のアイヌと沖縄人に近く、その後に渡来した「弥生人」は、大陸から渡ってきた「モンゴロイド」だという説が主流になっている。

いわゆる「二重構造説」だ。

このような事実を考えてみても、日猶同祖論のような説はまともには受け入れられない。

日本語の片仮名・平仮名は実はヘブライ文字またはそのルーツであるアラム文字を元にし

て作られたという説がある。

『大和民族はユダヤ人だった』を書いたヨセフ・アイデルバーグやラビ・マービン・トケイヤーたちが主張する説だ。

アイデルバーグはロシア生まれのイスラエル人で、失われた十部族と日本民族との関係を長年研究してきた人だ。

片仮名・平仮名ヘブライ語起源説を自分なりに調べてみたところ、仮名の起源は、通説どおりに万葉仮名を元にして形成されていったと考えるのが妥当だろうと思うようになった。もっとも、仮名文字の一部にヘブライ文字が取り入れられたという可能性は、まったく否定はできないだろうが。

『片仮名・平仮名とヘブライ / アラム文字比較表』を下記 URL に置いてあるので、興味がある方は見ていただきたい。

<http://www.ne.jp/asahi/pasar/tokek/DL/KatakanaHebrew.pdf> ）。

もともと、片仮名や平仮名の起源は万葉仮名にあるというのが定説になっているのに、それ以外の異論を唱えるのは、そういう定説を知らない外国人だからこそなのだろう。

失われた十部族の末裔が現存しているという話は、中国、アフガニスタン、インド、アメリカなど、世界中にある。

それらを全部真に受けていたら、收拾がつかなくなってしまうかもしれない。

だが、これを真剣に調査している機関が現在のイスラエルにある。

この調査機関は『アミシャブ (Amishav、「我が民は戻る」の意)』といい、1975 年に設立されて以来、失われた十部族の末裔が現存する世界各国の地域を調べている。

アミシャブは、失われた十部族が渡来した国として、日本も調査の対象としている。

そして、次のような公式見解を発表している。

「十部族の大集団は、東方に向かってシルクロードを進み、その途中でときおり数グループの人々が、主流からはずれ定住していった。それらの人びとが、今日アフガニスタン、パキスタン、カシミール、チベット、中国、その他に現存している十部族の人びとであり、

また中国に達したときに、幾人かのグループが南に向かって行き、タイ、ビルマ、インドに達した。そして本隊は、朝鮮を経由して日本に到達したと思われる。」(『日本・ユダヤ連合超大国』小石豊著 より)

「本隊」というからには、十部族をまとめる長である人々、つまり天皇家を含む天孫族(=倭人)が十部族の末裔であると暗に示しているのかもしれない。

この見解がどこまで真実かは今後さらに調べていくことにしたいが、上記で「主流からはずれ定住していった」人々のひとつの候補として、インドとミャンマーの国境近くに住むマナセ族がいる。

アミシャブの調査によると、この部族にはイスラエルの習慣とおぼしきものが現在もあり、名前からしても間違いなく十部族のひとつであるマナセの子孫だという。

そして、ミャンマーに住むこの一族 500 人は、将来イスラエルに移住することになるだろうとのこと。

では、日本人の一部が失われた十部族の末裔だということが仮に判明したときに、マナセ族と同様にイスラエルに移住することがありうるだろうか？

それは、まずありえないだろう。

失われた十部族がユダヤ人として回復するためには、ユダヤ教への改宗が必要となる。

基本的に「ユダヤ人」というのは人種的な定義だけではなく、「ユダヤ教を信仰する人々」である必要があるからだ。

現在のように正月には神社へお参りして、結婚式はキリスト教式、死ぬときは仏教式の葬式をあげるなどということでは、到底イスラエル人たちに受け入れられないだろう。

たとえば仮に、日本に住む秦氏の子孫がイスラエルの末裔だということが証明されたとしても、彼らがユダヤ教徒になってイスラエルへ移住する可能性は低いだろう。

アミシャブが日本人を十部族の末裔として公式に認定しない理由として、この点がネックとなっているのだといわれる。

前述のような日猶同祖論の「トンデモ説」を取り除いていっても、古代の日本とイスラエルには風習や宗教儀礼に共通点が見られ、それらは無視することができないほどに多い。

特に、ユダヤ教と日本神道の宗教儀礼についての共通点が多く見られる。

以下にその例を紹介するが、これらは主にラビ・マーヴィン・トケイヤーの研究成果を参考にしている。

この人はニューヨーク在住のユダヤ人であり、名前の通り、ユダヤ教のラビ（祭司）だ。

古代イスラエルと日本の関係を古くから研究するユダヤ人の一人でもある。

1968 年に来日し、ラビとして 10 年ほど滞在した。

トケイヤーは日本滞在中に、『ユダヤと日本 謎の古代史』を著した。

この本は、私が初めて読んだ日猶同祖論関係の本だった。

その続編が、20 年以上もの歳月を経て日本で出版された。

『聖書に隠された 日本・ユダヤ封印の古代史 - 失われた十部族の謎』がそれだ。

この本は、巷にあふれる、教養を欠いた人の手によるインチキ臭い日猶同祖論の類とは一線を画している。

古代の日本とイスラエルの失われた十部族の関係について、30 年もの歳月をかけて研究を続けてきた人の手によるものであり、他者による同種の主張を慎重に検討し、怪しいものを退け、また不確かな部分があるものは一つの説として客観的に紹介している。

この本を読んだ後で、失われた十部族の末裔の一部が古代の日本に渡来し、日本の神道や文化の形成に大きな影響を与えたという説に、かなりの信憑性があることがわかった。

## ユダヤ教と日本神道の類似点

日本の神社では、榊の枝や白い紙を先に付けた祓い幣を使ってお祓いをする。

イスラエルでは、古代からヒソプという植物を左右上下に揺り動かして、お清めをしていた。

お清めといえば、日本人は塩を使って身を清めるが、イスラエルにも同様の習慣がある。

ユダヤ人は、パンに塩をふりかけることから食事を始める。

食卓を聖なる祭壇とするための、昔からの風習からきている。

日本では神社に塩を供えるが、古代イスラエルでも神前に塩を捧げた。

だから、イスラエル人が日本の相撲を見た時に、相撲取りが試合前に土俵に塩を撒くことの意味を、彼らは即座に理解できるのだという。

同様に、神社の神官が行うお清めの意味も即座にわかることだろう。

穢れの観念においても、日本の神道とユダヤ教には共通するところが多い。

古来、日本では生理期間中の女性は神事に参加できなかった。

古代のイスラエルでも同様だった。

出産の後も穢れている状態とされていたという点でも、共通している。

10 世紀に書かれた『延喜式』によると、神事に携わってはいけない忌みの日数を、出産の場合は 7 日間と定めていた。

聖書でも、女が身重になって男子を産んだあとは 7 日間、女子の場合は 2 週間、穢れた状態にあるとしている。

更にその後、男子を産んだ場合は 33 日間、女子の場合は 66 日間にわたって、血の清めのためにこもらなければならないとしている。

日本でも、産屋と呼ばれる小屋にこもる習慣があった。

そして、忌みの期間が明けた後ではじめて初宮詣ができることされたが、その期間は、男子の場合は生後 32 日目、女子の場合は 33 日後に行われることが多かった。

その初宮詣に子供を抱いていくのは母親ではなく、それ以外の者が抱えていった。

この点でも、古代のイスラエルでも共通していた。

日本の神社では、神聖な儀式では神官が白無垢の衣を着るが、かつてダビデやレビ族の祭司たちも、白亜麻布の衣を着ていた。

また日本の神官の袖には房がついているが、これも古代イスラエル人の風習と同じで、聖書には「身にまとう着物の四隅に、ふさを作らなければならない」(申命記 22.12)とある。

神道の神官は、首を通すところに穴を開けた一枚布の長方形の布を被っているが、ユダヤ



教の祭司も同様の外衣を着る。

また、神道の烏帽子に似た帽子も、ユダヤ教の祭司たちが用いていたという。

日本人は単一民族であると信じている人は、もはやあまりいないだろう。

日本人の起源については、遺伝子やウィルスや様々な角度から、科学的手法を取り入れて最新の研究がなされている。

その成果によると、先住民（縄文人、アイヌ人）が住んでいた太古の日本に何種類かの民族が渡来し、同化し、日本という国が作られていったと考えるのが自然であるようだ。

そして、その中にはシルクロードを通して来ていたユダヤ人たちがいたとしてもおかしくないだろう。

イスラエル十部族の末裔は、太古の信濃の土地をも訪れていたかもしれない。

特に諏訪地方、つまり百瀬（筆者）の先祖が代々住んでいた地でもある。

諏訪大社上社の伝統的な祭『御頭祭（おんとうさい）』では、聖書とそっくりのイスラエルの古い風習が残されている。

旧約聖書の「創世記」22 章では、イスラエル十二部族の祖であるアブラハムが、神から信仰を試されるために息子イサクを生贄として捧げるように命じられる。

アブラハムは「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい」と神に言われる。

そして、「あなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとして、イサクをわたしに捧げなさい」と命じられる。

アブラハムは苦悩の末にイサクを生贄に捧げることを決意し、息子を薪の上に置いて小刀で屠ろうとした時、天使が現れて止めた。

アブラハムは、息子の代わりに雄羊を生贄に捧げた。

御頭祭では、この「イサク縛り」の伝承とそっくりな神事が行われる。

まず 8 歳ぐらいの少年が「御贄柱（おにえばしら）」と呼ばれる木に縄で縛られる。

次に人々は少年を、柱ごと竹のむしろの上に押し上げる。

そのとき神官が小刀を取り出し、これを振り上げる。

すると、別のところから現れた者がこれを止め、少年は解き放たれる。

その後、現在では行われていないが、かつては 75 頭の鹿を生贄に捧げたという。

昔の日本には羊がいなかったから、鹿になったのだろうか。

御頭祭が行われる 4 月 15 日は、イスラエルではちょうど過越の祭の頃にあたる。

アブラハムがイサクを生贄に捧げようとした「モリヤの山」は、エルサレム旧市街の、かつてユダヤ教の神殿があった丘のことだ。

モリヤ (Moriah) の本来の意味は、「ヤーウェ顕現の地」であるという。

そして諏訪大社上社は、守屋山 (モリヤ山) という山に面して建っていて、この山自体が、この神社のご神体なのだ。

このことは、御頭祭が旧約聖書の「イサク縛り」の伝承に由来しているかもしれないということを示唆していて、興味深い。

諏訪大社はモリヤの神を祀った神社であり、御頭祭は代々、守矢家の人々が採取となって伝えてきた。

現在の守矢家の当主は 78 代目だという。

一代 25 年としても 2000 年近く続く由緒ある家柄ということになる。

蛇足だが、イスラエル人の名前には、日本人の名前に似ていてハッとするものがよくある。

モリヤもその一つで、イスラエルのテルアビブに仕事で行く時に毎回泊まるホテルが「モリヤ・プラザ・ホテル」で、日本人の名前に似ているなといつも思ったものだった。

他にも、たとえばナオミ、カディマ (鹿島)、ホセア (細屋)、ダン (団)、ヨナ (与那)、ミシマ (三島) とか、いろいろあるが、これらの名前は聖書の時代からあったものだ。

諏訪地方にはミシャグチ神という土着の神が、古くから信仰されてきた。

ミサクチ、ミシャクチ、ミシャグチ、ミシャクジなどと発音され、さまざまな当て字もあ

るが、これがモリヤの神と同一の神だという説もある。

清川理一郎の『諏訪大社 謎の古代史』によると、「ミサクチ」は「ミ＋イサク＋チ」で、「ミ（御）」は接頭辞で、「チ」は蛇の古語の「チ」ではないかという。

つまり、ミサクチの名前にはイサクの名が含まれるというのだ。

諏訪のモリヤの神は「守屋」「守矢」「洩矢」などとも書くが、出雲族が諏訪にやってくる前から居た先住民である漏矢族が信仰する土地神だったらしい。

彼らはイスラエル十部族の末裔だったのだろうか。

だとすると、秦氏が渡来するずっと以前に、すでに別系統の十部族の末裔が日本列島に住み着いていたことになる。

だが、この部分についての私観を述べると、上記の説よりも、「御石神（ミ＋シャクジン）」とする方がノーマルな解釈ではないかと思う。

修験道の修行を行う山伏にも、イスラエルとの共通点が見出される。

ラビ・トケイヤーは、京都で山伏の姿を初めて見たときに、「すっかり人生が変わってしまった」と書いている。

その姿が、あまりにも「ユダヤ的」だったからだ。

山伏は兜巾と呼ばれる黒い箱を額に付けているが、ユダヤ人もフィラクテリーと呼ばれる黒い箱を額に付ける。

古代イスラエルの大祭司が額に聖なる札をつけていたことは、聖書にも書かれている。

また、山伏は法螺貝を吹き鳴らすが、ユダヤ人は祭のときなどにショーファールと呼ばれる羊の角でできた笛を吹く。

昔の日本には羊がいなかったから、代わりとして法螺貝になったのだろうか。

山伏の衣服には房がついていて、四角い胸当てを首からかけている。

これも、古代イスラエルの祭司が身に付けた胸当てと似ているという。

山伏といえば、日本の天狗も山伏の格好をしているが、鼻が突き出て赤い顔をした天狗は、鷲鼻で赤ら顔の典型的なユダヤ人の容貌を思い起こさせる。

日本の神社と古代イスラエルの神殿にも、類似する点が多い。

日本の神社には、本殿を朱色で塗ったところがある。

秦氏と関係が深い神社でそういう傾向があり、また稲荷社や八幡社では、鳥居も朱色だ。

紀元前 3300 年頃、古代ユダヤの民は移動可能な神殿を作り、内部を赤い色で塗った。

神社の入口には、必ず鳥居が立っている。

鳥居のもっとも古い形は、左右 2 本の柱だけだったという。

現在でも、奈良の杣原神社のように、2 本の柱に注連縄を渡しただけの鳥居も残っている。

聖書によると、古代イスラエルの神殿にも、入口に左右 2 本の太い柱が立っていた。

イスラエルで買った聖書時代のエルサレムの地図が載っている本には、古代イスラエルの神殿のイラストがある。

これを見ると、石造の神殿の玄関部分に 2 本の柱があり、その柱と上部の鴨居だけが木造になっているようだ。

そして、その柱の基部には、各 2 頭ずつの座った獅子の像がある。

この外観は、日本の神社の鳥居を思わせるものだ。

もっとも、鳥居の起源は東アジアの中国南部や朝鮮半島にあるという説が主流になっていて、これに関してはイスラエル起源だと断定はできない。

また神道では水を使って禊ぎをするが、古代イスラエルにも、水で体を清める風習があった。

日本の神社の鳥居をくぐると、口と手をすすぐための手水舎（てみずや）があるが、古代イスラエルの神殿にも、神殿の内庭に「洗盤」または「青銅の海」と呼ばれる禊ぎの場があって、ここで手と足を洗った。

今日でも正統派のシナゴーク（ユダヤ教会堂）には、入口近くに手を洗い清めるための場所がある。

日本の神社には必ず賽銭箱が置かれているが、聖書によると、BC9 世紀の南王国ユダの王ヨアシュの時代に、神殿に献金箱が置かれるようになったという。

神社の参道の両脇には狛犬が座しているが、犬といっても実際は獅子だ。

BC10 世紀に建てられたソロモン神殿の中には、ライオンの像やレリーフがあったという。ただし、狛犬のようなものはアジア大陸の各地で類似するものが残っているので、日本とイスラエルだけの共通点とはいえないだろう。

日本の神社は、御祭神が鎮座する本殿と、祭員が着座し礼拝するための拝殿から成っている。

古代イスラエルの神殿も、「聖所」と「至聖所」の二つの場所に分かれていた。

もっとも、拝殿は平安時代になってから現れた社殿であって、古くは本殿前方の庭上が使われたという。

神社では、本殿は拝殿よりも少し高いところに位置し、本殿との間は階段で結ばれている。同様にイスラエルの神殿でも、聖所は至聖所よりも一段高いところにあり、その間は階段があった。

日本の神社の多くは東向きか南向きに建てられているが、古代イスラエルの幕屋や神殿は東向きだった。

もっとも、この点は世界の他の宗教施設にも共通した点かもしれない。

偶像がまったく置かれていないという点でも、日本とイスラエルの神殿は共通している。神社で偶像の代わりに置かれているものとして、本殿の銅鏡があるが、昔ユダヤのユダヤの移動可能な神殿の天幕の内側にも、銅製の鏡が置かれていたという。

日本では神社の祭のときに神輿を担ぐ。

BC1000 年頃、イスラエルのダビデ王は、神の「契約の箱」を担いでエルサレムに運び入れた。

契約の箱とはアカシア材で作られた移動式の神殿で、金箔で覆われたその外見は、日本の神輿と酷似している。

聖書には、その契約の箱の規格が詳細に書かれている。

長さ 113 センチ、幅と深さはそれぞれ 68 センチほどの長方形の箱だった。

箱の下につけられた 2 本の棒で担ぐようになっていた。

イスラエルのレビ族の祭司がこれを担ぎ、エルサレムの街中を練り歩いた。

日本の神輿の屋根には、翼を広げた「鳳凰」が付いている。

契約の箱の上には蓋があり、その上には二人のケルビム（天使の一種）が翼を広げて向かい合った像が乗っていた。

聖書によると、ダビデは契約の箱をエルサレムに運び入れた後、それを天幕の中に置き、人々にパンや菓子を与えたという。

なんだか、日本の祭の風景を思い起こさせる記述ではないか。

神輿の起源については明らかではないが、『続日本記』に見られる「天平勝寶元年(七四九) 東大寺の大仏建立に際し、造営の無事祈願のため九州の宇佐八幡宮大神を平城京に奉遷、このときに紫色の輿が用いられた」というのが最も古い記述だ。

このときの輿とは、天皇と皇后の乗り物だったという。

宇佐八幡宮といえは、秦氏の創建による神社ではないか。

ユダヤ教徒の男性は、幼時に割礼を行うことを義務付けられている。

日本でも、かつてある地域では割礼が行われていた。

明治時代の始め頃まで、高知県、兵庫県、山形県などで、カヤやススキの葉を使って包皮を切る成人式があったという。

日本の皇室でも、密かに割礼が行われていたという噂があるが、確かめるすべはない。

ラビ・マーヴィン・トケイヤーが日本滞在中に、イスラエルの主席ラビであるシュロモ・ゴレン氏が来日したが、その時のエピソードも興味深い。

ゴレン氏は日本という国に大変興味をもち、日本神道の真髄を学びたいと思い、しばしば国学院大学の講義に出席していた。

ラビ・ゴレンは教授に、日本の神宮を警備する人たちに関して質問をした。

警備員たちが立つ場所、巡回する順番、警備員の交代などについてである。

教授の答えによると、その警備の仕方は、なんと古代イスラエル神殿で行われていたものと全く同じだったという。

イスラエルの神殿は西暦 70 年に破壊されて以来、再建されていない。

それなのに、なぜこうした共通点があるのだろうか。

イスラエル十部族の末裔の一部が日本を訪れたならば、そして日本の文化に大きな影響を与えたとしたならば、彼らの言葉が日本語に入り込んでいてもおかしくないだろう。

日猶同祖論者たちの間では、ヘブライ語と日本語で共通する言葉があるという主張が古くから行われてきた。

前述のヨセフ・アイデルバーグも、その著書『大和民族はユダヤ人だった』で、多くのヘブライ語と日本語の単語のリストを載せている。

だが、個人的にはこの中の半分以上の例は同意しかねる。

たとえば BARER がヘブライ語で「見つけ出す」だからといって、それが日本語の「ばれる」の元になっていると言われれば、『「ばれる」なんて言葉は、古代の日本にはなかったんじゃないの?』と思うのが普通だろう。

KNIYA が「購入」という意味だからといって、日本語の「購入」と似ているとれば、「購入」って漢字の音読みだから大和言葉ではなくて中国語起源じゃないかと思ってしまう。

そこらへんが、日本語に精通していない外国人が書いた著作の限界だろう。

すくなくとも、誰か学識のある日本人にチェックを求めるべきだったろう。

これに比べて、ラビ・トケイヤーが『日本・ユダヤ・封印の古代史』で紹介している例は、数は少ないが、アイデルバーグ説よりは検討の価値がある。

この二人が紹介する例の中で検討の必要があると思われる単語や、自分で独自に集めた単語をまとめると、ちょっとした数になる。

以下にその比較表を下に示すが、あくまでも研究の途中段階であることをご承知願いたい。

日本語	漢字	意味・解説	古代日本語	ヘブル語
あがた	県	上代:諸国の皇室の料地。平安:国司などの任	あがた	aguda=集団
あきば	秋葉	地名、秋場神社		Akiba(地名、人名)
あく	悪		あし=悪し	アシマ(ashima)=罪、違反
あくむ	倦む		あくむ=嫌になる、疲れて飽きる	agum=悲しい、悲嘆にくれた
かさ	笠		かさ	kasa=覆う
かるい	軽い			kal=軽い
さるめ	猿女	古事記では、天照大神が天岩戸に籠もった時に、天宇受売命(あめのうずめのみこと)が舞を舞って大神を外に出すのに貢献した。その子孫は猿女の君を名乗り、宮中で楽を奏し、舞を舞う仕事を任さ	さるめ(? 女/猿女)=宮中の女儒の一種、大嘗祭などに奉仕する女官。	サロメ(Salome)=新約聖書で、ヘロデ王の後妻ヘロデヤの娘。王に踊りの褒美にバプテスマのヨハネの首を求め、銀の盆に載せて母に捧げた。
しまんとがわ	四万十川	高知県と愛媛県を流れる川名。物理学者の寺田寅彦は、アイヌ語で「シ(はなはだ)・マムタ(美しい)」説を唱えた。		シマント='豊かな、肥沃な、太った'の意味の比較級。
しろ	城			シロ(12部族の宗教的・軍事的中核地)社
とる	取る			trl(トル)=取る
なく	泣かせる	泣く(上代東国言語)	泣く	nahak=泣く、叫ぶ
なす	為す	行う、する	なす	nase=する、試す
ぬし	主	主人の尊称。	ぬし	nasi=長、指導者、
ねむる	眠る		ねぶる	nam=うとうとする
のける	退ける	どける(他動詞)	のく	naker(動かす、取り出す)
はかる	測る		はかる	hakar(ハカル)=調べる、測る
はこ	箱			アーク=箱(定冠詞ハを付けてハーク)
はしる	走る		はしる	hasi=急ぐ
はずかしめる	辱める	恥をかかせる。	はづかしむ。	hazek hashem(ハゼカシエム)=名を傷つける、屈辱する。
はや	早		はや=早く(副詞)	haya=速く、急速に
はら	原			hara=斤
ほる	掘る			horer=くり抜く
ほろぶ	滅ぶ		ほろぶ	harav(ハラヴ)=滅ぶ、破滅する
みち	蜜	蜜、蜂蜜		mit=果汁
みず	水		みづ	mizla=流れる水
みや	宮		みや	miya=神様の場所、神様のいる所
みやつこ	造	宮中または地方で部族と統率した者	みやつこ	miyatseg=代表者
もの	物		もの	mono=物、事
もりや	守屋	守屋山=長野県の諏訪大社のご神体の山。この山でアブラハムによるイサク献納の儀式と同一の御頭祭を行う。		Moriah=人名、エルサレムの神殿がある山の名前。
やさか	八坂・弥栄			ya sakha=神への信仰
やしる	社	地を清め壇を設けて神を祭った所	やしる	ヤ・シロ=神のいる場所?(Ya=神)
ゆるし	許し	許されること		yurshe=許される

日本語とヘブライ語の単語比較表



## 聖書と記紀の類似点

このように、日本の古くからの風習や宗教儀礼にイスラエルとの共通点があるので、日本を訪れたイスラエル人の中には、そういう共通点を見て日本に親しみを感じる人も多いようだ。

仕事柄、多くのイスラエル人たちと接触する機会があるが、日本を訪れたエンジニアたちにも、日本の神社仏閣を見てみたいので良いところを教えてほしいと言ってくる若者がいる。

また、学生の時に関東地方から東北を3ヶ月かけて自転車で廻ったという男もいた。

イスラエル人たちの間には、日本人が「失われた十部族」の末裔だという説が知られていて、それで関心を持つのだろうか。

東京あたりの路上でアクセサリーを売るイスラエル人の若者たちの中にも、そういう目的で日本を訪れる人々がいるのかもしれない。

ヨセフ・アイデルバーグの『大和民族はユダヤ人だった』は、その主張に同意しかねる部分も多々あるが、示唆に富んだところも多い。

アイデルバーグはイスラエルの失われた十部族を捜し求める旅に出てアジア各地を回り、最後に日本に辿り着いた。

きっかけは、アラビア半島東端の国オマーンのバハラ地方に住む少数ユダヤ人たちによって語り継がれてきた伝説を知ったことによる。

それによると、十部族はサマリア王国を追放された直後、アッシリアから逃れて東方へ進み、放浪の果てに中国の彼方の神秘的な国に辿り着いたという。

アイデルバーグは日本のことを更に調べるために来日し、京都の護王神社に出仕（研修生）としてしばらく仕えた。

そして、神道の習慣の中にユダヤ教との共通点が多く見られることに驚いた。

また、『古事記』と『日本書紀』に書かれた神話の中に、聖書の記述と類似した部分が多く見られることにも注目した。

ついて詳しく書くと長くなるが、記紀神話と聖書の共通点をまとめた表を以下に示す。

確度	旧約聖書	日本書紀	古事記	備考
3	はじめイスラエル民族の父祖となるはずだったのはヤコブではなく、兄のエサウだった。しかし神の民の祝福はヤコブに引き継がれ、イスラエル民族の父祖となった。		スサノヲがアマテラスの角髪 <small>ツノカミ</small> の珠 <small>タマシ</small> (八尺の勾玉の五百津の美須麻流の珠)を嚙んで吐き捨てた時、一番初めに生まれたのが天忍穂耳命(アメノオシホミノミコト)で、アマテラスに天孫降臨の命を受けたが、ヨロズハタトヨアキツシヒメとの間に生まれたばかりのホノニギにそれを譲る。	
5	イサクの子ヤコブは美女ラケルに恋をして妻にさせようとするが、彼女たちの父は、目が弱い姉のレアももらってくれとヤコブに頼む。だがヤコブはレアを嫌った。(創世記29章)		邇邇芸命は大山津見神の娘の木花佐久夜姫(コノハナサクヤヒメ)に求婚するが、姉の岩長比売(イワナガヒメ)も一緒にもらうことを請われるが、醜かったので父へ返してしまう。	
4	ヤコブとラケルの子ヨセフは腹違いの兄たちにいじめられ、奴隷としてエジプトへ売られた。そこで宰相の地位まで上り、兄たちが凶作で苦しみエジプトへ来た時に兄たちを助け、その罪を許した。(創世記37章～)		邇邇芸命(ニニギノミコト)と木花佐久夜姫(コノハナサクヤヒメ)の子の山幸彦(ヤマサチヒコ)は兄の海幸彦(ウミサチヒコ)にいじめられ、海神の国へ行く。そこで山幸彦は神秘的な力で田畑を凶作にして兄を悩ませるが、兄の罪を許した。	
	ヨセフはエジプトの祭司の娘を娶りマナセとエフライムを生む。エフライムは4人の子供を生むが2・3子は死に、4子の子孫ヨシュアがカナンの地を征服する。		山幸彦は海神の娘を娶りウガヤフキアエズを生むが2・3子はいなくなり、4子の神武天皇が大和を征服する。	
3	第1月14日の真夜中に、モーゼたちは移動前にエジプトにいた。そして西方の荒野へ向けてサハラの方へ旅立った。	神武天皇は東征前には日向の曾保里(ソホリ)にある高千穂峯にいた。そして東方へ旅立った。		「ソホリ」は、都という意味の朝鮮古語「蘇伐」「徐伐」(sa buru, si buru)に由来するという説がある。
2	モーゼたちはエジプトを出て最初に葦の海(ヘブル語でヤム・サフ)を渡った。	神武天皇は葦原の国へ向けて旅立った。		
3	葦の海(ヤム・サフ、紅海)を越えてサハラのテイベステイ地方を旅するうちに、穴居族のテダ種族と遭遇した。	層富県(ソホノアガタ、奈良県)を旅するうちに、穴居族の波多(ハタ)丘岬の穴居族である土蜘蛛族と遭遇した。		
2	エジプトを出て旅立って40年目に、モーゼは山に登り神が子孫に与えた国を見渡した。	葦原へ旅立って37年目に、神武天皇は山に登り神が子孫に与えた国を見渡した。		カナンはヘブル語の「カヌ・ナー(canne-naa) = 葦の原」か？
4	モーゼがカナンの地を偵察するために送った一団は、ユダにあるヘブロン <small>ヘブルン</small> の町に着いた。	神武天皇が熊野から北進して吉野に入る時、先遣隊として送った日臣は八咫烏に導かれて菟田(ウダ)下県 <small>ウダノカミ</small> の穿(ウカチ)の邑(ムラ)に着いた。		宇陀又は宇太(延喜式)、宇多(倭姫世紀)、宇(倭名)とも書く。

確度	旧約聖書	日本書紀	古事記	備考
3	ダビデ王は主の宮を建てるための強制労働制で「イスラエルの人々を数えてはならぬ」という慣習に反して軍の長ヨアブに全部族の民を数えよと命じた。そして <b>3年間の飢饉にみまわれ</b> (IIサムエル記21.1)、 <b>悪疫により7万人が死んだ</b> (IIサムエル記24.15)。預言者 <b>(ホゼ)</b> のガデは「オルナンの打ち場」に1つの祭壇を築くことを王に勧めた。	崇神天皇9年の3月、 <b>疫病が3年間続き</b> 、人口の半数が死んだ時、天皇の夢枕に神人が現れ、「墨坂の神と逢坂の神を祭れ」と御神託があった。天皇はフトマニ占いを行って神に願った。鹿の骨をあぶって割れ目を読む役目を戸座 <b>(ヘザ)</b> と呼んだ。		ヘブライ語で「 <b>ペター・マニ</b> 」は「開いた目を数える」という意味 <b>フトマニ</b> 。南九州では秋の収穫祭を <b>ホゼ</b> という。
5	ダビデ王の軍隊は <b>エドム</b> のシア山で戦った。(サムエル記8.14)	崇神天皇の軍隊は <b>イドミ</b> の山城で戦った。	崇神天皇の軍と建波邇安王の軍が、山城の和訶羅河(木津川)を挟んで挑(イド)み合った。それゆえそこを「 <b>伊杼美(イドミ)</b> 」と言い、今は「伊豆美(イツミ)」と言う。	出雲はアジアとアフリカの中間の地峡 <b>イドム</b> [エドム。死海とアカバ湾の間の古代王国]で、大国主神はヨセフ及びダビデである(木村鷹太郎説)。
1	ダビデ王の死後、王位を継いだソロモン王は <b>イウス</b> の町(今のエルサレム)に神殿を建設した。	垂仁(すいにん)天皇は最初の神宮を <b>伊勢</b> に建てた。		
1	神がソロモン王の夢に現れて、神を敬うならば命は長らうだろうと言った。	垂仁天皇は大和の神から、神の道を奉ずれば、その命は長らえるとご託宣を受けた。		
4	土師エホデは <b>衣の下に剣を隠しケモシ</b> (Chemosh、モアブ)人の首領を殺した(土師記3-16~)	日本武尊は、童女に扮し、 <b>衣の下に剣を隠して熊襲</b> の首領を刺した。		
4	モーゼは出エジプトを果たして、 <b>ネボ山</b> (現ヨルダン)で亡くなった。	日本武尊は、伊勢の国の鈴鹿群能煩( <b>ノボ</b> )野(三重県亀山市)の荒野で亡くなった。		
1	サウル王は民の誰よりも肩から上だけ背が高かった。	仲哀天皇は身長が3メートルもあった。		
3	サウル王はモアブ人( <b>ケモシュ人</b> )と戦った。(Iサムエル記14.47)		仲哀天皇は <b>熊襲(クマソ)</b> と戦って鎮圧した。	
2	サウル王は神の言葉に従わない罪として早死にした。		仲哀天皇は神の御神託を信じなかったために早死にした(52歳)。	
3	サウル王はペリシテとの激戦で、 <b>矢に当たって重傷を負い</b> 、自ら命を絶った。	仲哀天皇は熊襲の <b>矢で腹を射抜かれて</b> 亡くなった。		
4	サウル王は死後ベニヤミン族の地に葬られた。エルサレムの近くにはベニヤミン族の領地 <b>アナト(アナトテ)</b> の町がある。	仲哀天皇は <b>穴戸(アナト)</b> (今の長門)の仮陵に葬られた。		オリエント神話でアナトはカナアンの女神で、バアルの妹かつ配偶者。アシラトと同一視。トルコのアナトリア?

こうして比較してみると、古代イスラエルと大和国の指導者たちの行動や、人名・地名などの固有名詞で、類似する部分が多い。

これだけの数になると、偶然の一致とする説明はむずかしいだろう。

それぞれの人物の対応を見ると、以下ようになる。

- ・ ヤコブ（イスラエル民族の父祖）とニギノミコト（天孫族の父祖）
- ・ ヨセフ（ヤコブの子）と山幸彦（ニギノミコトの子）  
（共に美女の妻を娶るが、醜い姉も娶るように言われる）
- ・ エフライムとウガヤフキアエズ  
（共に兄にいじめられ、遠いところへ行くが、後に兄を許す）
- ・ モーゼと神武天皇  
（共に『葦の原（＝カナン？）』に向かって旅立った）
- ・ ダビデ王と崇神天皇  
（共に3年間の飢饉または疫病に見舞われ、多くの民を失う）
- ・ ソロモン王と垂仁天皇  
（共にイウスまたは伊勢に神殿を建てる）
- ・ 土師エホデと日本武尊  
（共に衣の下に剣を隠し先住民の首領を倒した。またネボ山または能煩[ノボ]野で没した）
- ・ サウル王と仲哀天皇  
（共に背が高く、ケモシュまたは熊襲と戦い、矢に射抜かれて没した）

このように、古代イスラエル民族の系譜と日本の天皇家の系譜に、明らかな一致が存在する。

日本のアカデミズムがどんなに無視しようと、この一致は否定できないだろう。

意図的に書かれたものとは思えない。

これらは所詮「神話」であり、すべてが史実であるわけではない。

だが、少なくともこうした神話を日本に持ち込んだ者がいたことは事実だろう。

では、いったい誰が、聖書の物語を真似て記紀に反映させたのだろうか。

それは、秦氏だったのではないか。

大輪岩雄は『秦氏の研究』の中で、秦氏が『古事記』の編纂に関与していたという説を出している。

そして、秦氏は同じ新羅系渡来氏族である太氏との密接なつながりから、両氏は共謀して神統譜をつくり『古事記』に付加、挿入していったのだという。

梅原猛の『神々の流竄』によると、『古事記』と『日本書紀』の真の作者は藤原不比等だという。

その撰修メンバーの中には、太安万侶の他に秦氏もいたのではないか。

そうとでもしなければ、記紀に見られる聖書の記述との一致点が説明できないだろう。

これまで紹介してきた古代イスラエルと日本の宗教儀礼や風習などの共通点は、ごく一部にすぎない。

このように日本とイスラエルの間には多くの共通点があり、これらが偶然に共通していると考えるには、あまりにも無理がある。

古代にイスラエルの民が日本を訪れ、日本に彼らの文化や宗教儀礼や技術をもたらしたとでも考えないと、説明がつかないだろう。

そして、それらをもたらした存在は、渡来民である秦氏の一族だったと考えるのが、可能性としてもっとも大きいのではないかと思うのだ。

## 影の存在

秦氏の由来については、とにかく謎に包まれている。

古代史上有数の巨大氏族であったにもかかわらず、その地位はあまりにも低かった。

そして、日本史の中で、あまりにも長い間、大きく注目を浴びずに来た。

だが、自ら好んで低い地位に甘んじていたと思われる節がある。

後に述べるが、平安京の造営も秦氏一族の力なくしては実現しえなかっただろうと言われ

ている。

だが、常に『影の存在』として動いていたように思われる。

彼らは、日本でいったい何をしたかったのだろうか。

秦氏の一族は、京都の太秦（うずまさ）周辺に居住していた。

だが、それより古い時代から、彼らは「秦王国」に居住していたらしい。

大和岩雄が『日本にあった朝鮮王国』や『秦氏の研究』で述べている説だ。

この秦王国は、古代中国の史書にも登場する。

推古天皇 16 年（608 年）隋の皇帝は使者を倭国に派遣した。

『隋書』の「倭国伝」には、その使者が百済から渡来した順路が書かれているが、竹斯国（筑紫）国からを、次のように記している。

「竹斯国に至り、東して秦王国に至る。某の人中華夏に同じ。以って夷洲と為すも、疑うらくは、明らかにする能はざるなり。又、十余国を経て海岸に達す。竹斯国より以東は、皆倭に属す。」

ここで「華夏」は「中華」と同義だから、九州の筑紫国の東に存在した秦王国が、まるで中国人の国であるかのように思えたということになる。

この秦王国は北九州の豊前（現在の福岡県と大分県）にあったと思われ、その人口の 8 割が秦氏だったという。

秦氏一族が祀る八幡神も、この秦王国に起源を発するようだ。

これはあまり言われていないことだが、秦氏の信仰にはシャーマニズムの要素もあったと思われる。

それが八幡信仰に取り入れられ、秦王国はシャーマニズム王国でもあった。

旧約聖書の時代にも、イスラエルの指導者たちや預言者たちは神と対話していたのだから、そこには広義のシャーマニズムがあったといえる。

大和岩雄は、次のように書いている。

「『秦王国』の信仰は、仏教・道教に朝鮮の民間信仰、さらにわが国の民間信仰がミックス

した、特殊な信仰であった。だから、神祭りの巫も、秦王国（豊国）の巫は特に『奇巫』と呼ばれた。」（『日本にあった朝鮮王国 謎の『秦王国』と古代信仰』、大和岩雄 より）  
だが、秦氏がイスラエル十部族の末裔であったとすれば、秦王国の信仰の中心にあったのは、イスラエルの宗教だっただろう。

八幡はかつて「ヤハタ」とか「ヤハダ」と発音され、これはヘブライ語でユダヤを意味する「イエフダ(Yehudha)」が訛ったものという説もある。

もしそれが本当だとすると、八幡の神は「イスラエルの神」ということになる。

個人的には、八幡＝イエフダ説は、八幡神社の祭祀にユダヤ的要素が見られないことを考えると、たんなるゴロ合わせで終わってしまっているかもしれないと思う。

秦王国にあった仏教は弥勒信仰を重視する新羅仏教だったので、そこでは弥勒菩薩への信仰も盛んだった。

この弥勒信仰の影響を受けたひとりが、若き日の空海だった。

空海は遣唐使としての唐への渡航前に、秦王国にあった香春岳という山にこもったといわれる。

さらに、空海の師として知られる勤操大徳は天平勝宝 6 年（754）、大和国高市に生まれているが、空海の『勤操大徳影の讃序』によると、その父は秦氏だという。

空海は若い時に長岡京へ出て、勤操に師事した。

勤操は空海に虚空蔵菩薩求聞持法を授け、この行法によって、空海は明けの明星が口から入るという神秘体験をした。

また、唐から帰国後に、空海は嵯峨天皇から与えられた東寺を真言密教の根本道場として栄えさせた。

このときに空海を援助したのが秦氏で、建造用の木材を伏見の稻荷山から切り出して提供したりしたという。

このように、空海の活動の全般にわたって秦氏との関係がさまざまところで見え隠れしている。

空海はこの師を通じて弥勒信仰や、もしかしたら後に述べる景教の教えをも学んだかもし

れない。

京都には、特に彼らの居住地域であった太秦周辺には、秦氏にまつわる神社仏閣が多い。  
また、秦氏とは直接関係がないが、天橋立には元伊勢籠神社といって伊勢神宮の元の宮があり、そこには日本とイスラエルを結びつける様々な伝承がある。  
そこで、京都を拠点として、1日は天橋立へ行く二泊三日の旅行を計画した。

## 清水寺へ

2002年5月2日、木曜日

ゴールデンウィークの谷間に1日休暇を取って、真由美と一緒に、2泊3日で京都と天橋立の旅に出た。

『秦氏とイスラエルの関係を探る旅』だ。

2日目をまる1日使い、天橋立へ行くことにした。

東京駅から新幹線で4時間後に、京都駅に着く。

東山地区にある、ホテルサンルート京都にチェックイン。

北海道から出てきたばかりの真由美にとっては初めての京都なので、今日は清水寺と八坂神社へ行くことにした。

ホテルを出て、30分ほど歩いて清水寺へ。

いつものように、まず「顕界と霊界の間に調和が起こり、地球に神の国ができ、宇宙全体に平和がもたらされますように」とお祈りして、そして「このお寺にお参りに来る方々がすべて幸せになれますように」と。

どこへ行っても、自分のことは祈らない。

信仰する神社で、そういう風に教えられている。

宇宙創造の神を信仰する者にとって、他のどんな神社仏閣を訪れて手を合わせてもいいが、お参りさせていただくことへの感謝と宇宙全体の平和を祈るべきで、個人の願い事をして



はいけない、と。



清水寺の「清水の舞台」

おみくじを引いたら、二人とも「19番」の「末小吉」だった。

真由美との間では、こういう『シンクロニシティ』は日常茶番事だ。

後ろの方で若者が「またさっきと同じ凶が出ちゃったよ」と言っている。

ということは、凶もちゃんと入ってるんだ。

最近のおみくじの傾向として、凶を入れないところが増えているそうだが。

境内にある地主神社にもお参りする。

縁結びの神様として人気があるところだ。

おみくじを引こうとすると、縁結びのおみくじをいまさら引く必要はないと真由美が言うので、やめる。

## 八坂神社の謎

清水寺を出て、歩いて八坂神社へ。

拝殿を改築中なのが残念だ。

御祭神は、素戔鳴尊（スサノオノミコト）と櫛稻田姫命（クシイナダヒメノミコト）と八柱神子神（ヤハシラノミコガミ）。

八坂神社の社伝によれば、平安建都の約 150 年前の斉明天皇 2 年（656）の創建と伝えられている。

全国に約 3 千の分社があるという。

八坂神社がある東山一帯は、かつて高句麗からの渡来人であった八坂造（やさかのみやつこ）一族が住んでいたところだった。

いまでは、京都三大祭の祇園祭で知られる京都の観光名所だ。

おみくじを引くと、また二人とも同じ「11 番」の「中吉」が当たった。

清水寺の時もそうだったが、先に真由美が引いていた。

社務所で「蘇民将来札」というのが目に入る。

「祇園暦」とセットで 500 円だったので、いただくことにする。

「蘇民将来の子孫也」と書かれた親指大の木のお札で、一種の厄よけ護符だ。

これには、興味深い言い伝えがある。

奈良時代の編さんとされる「備後国風土記逸文」によると、素戔鳴尊（すさのおのみこと）が南海を旅した際、もてなしを受けた蘇民将来という人物に対し「蘇民将来の子孫と言って茅（ち）の輪を腰に着ければ厄を免れるだろう」と告げたという。

そして、家の門口に「蘇民将来子孫之門」などとした札を付けるということが、厄除けの風習として全国各地に広まった。

八坂神社の祇園祭では、ちまきと共に人々にこの札が与えられるという。

また伊勢神宮周辺の風習では、門符の裏側に竈目紋、つまりイスラエルの紋章であるダビデの星が入っているという。

2001 年には、1200 年前の「蘇民将来札（そみんしょうらいふだ）」の最古の札が、長岡京跡から出土している。

蘇民将來說話のオリジナルは、実は旧約聖書の『出エジプト記』の過ぎ越しの物語だという説がある。

昔、仔羊の血が戸口に塗られたユダヤ人たちの家以外で生まれた初子を、神ヤーウェがすべて殺した。

そのため、エジプト王の束縛からユダヤ人たちは逃れることができたという。

ユダヤ人はメズザといって、神の御言葉を書いた門符を家の門口に付けるという風習がある。

だからユダヤ人は蘇民将来の子孫のお札を見ると、どこかユダヤの風習に似ていると感じてしまうのだと、ラビ・マーヴィン・トケイヤーが『日本・ユダヤ封印の古代史』で書いている。

ただし、蘇民将來說話は朝鮮半島に起源があるという説もあるので、本当のところはわからない。

だが、これに似た風習は、他にもある。

琉球地方では「シマクサラシ（疫祓いの意味）」という風習があり、牛を屠ってその血をススキの穂や桑の葉などに浸して、家の門口や四隅に塗った。

シマクサラサー、スマウサラ、カンカー、マークサラサーウガン、スマフシャラ、ヤッフアラッサなどと、地方によって呼び名が異なるが、村に悪霊が入ってこないようにする魔除けの行事だ。

村中でお金を出し合って買った牛をつぶし、その肉を村の聖地や宗家に供え、残りは村中で分ける。

牛の血はススキの穂につけて、各家の壁やトイレや門に塗りつけ、ススキを屋敷の四隅の差したりする。

近年では牛の代わりに豚や山羊を使うようになったところもある。

これを行う時期は地方により、また村により異なるが、旧暦2月に行うところが多い。

このシマクサラシを思わせる宗教儀礼が、ユダヤ教にもある。

『旧約聖書』の出エジプト記 12 章に従って、毎年ニサンの月 14 日、今の暦（太陽暦）の 3 月末から 4 月初めころ、過越祭が行われる。

ちょうど琉球諸島でシマクサラシが行われるのと同じ頃だ。

かつてイスラエルの民が、神から遣わされたモーセに引率されて、奴隷状態に置かれていたエジプトから救い出されたことを記念して行う祭りだ。

過越祭では、小羊を屠って焼き、マツォという種なしパンとともに食べ、出エジプトを祝った。

過越祭は、エジプトで、神の手によって、すべての家の初子が撃たれるという災いが起きる前に、モーセがすべての長老を呼び寄せて次のように言ったことに由来する。

「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。そして、一束のヒソブ（ハッカ科の植物）を取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱の中の血を塗りなさい。

翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである。」（出エジプト記 12.22）

このように、シマクサラシと過越祭には偶然とは思えない共通点がある。

子羊と牛という動物の違いはあるが、琉球諸島に羊がいなかったから牛が使われたのかもしれない。

第 39 回柳田賞を受賞した小島瓊禮の『太陽と稲の神殿』（白水社）によると、このシマクサラシは古代の大和朝廷で行われていた稲作儀礼の名残であり、狩猟時代の面影を伝える儀式として沖縄に残ったという。

つまり、かつては本土でも同様の風習があったことになる。

もしこの儀式の起源がユダヤ教の過越祭にあるとすると、それを日本にもたらしたのは、渡来民の秦氏だったのだろうか。

八坂神社の祭神である素戔鳴尊は、バアル神（Baal）との共通点が多い。

バアル神はオリエントで広く信仰される、人身牛頭の荒ぶる神である。

スサノオは、牛の頭をもつ牛頭（ごず）天王と同一視される。

それにしても、八坂神社というのは実に不思議な神社だ。

秦氏の創建ではないが、古代イスラエルとの関係がいろいろ言われている。

明治以前は「祇園社」と呼ばれていたが、祇園はヘブライ語でユダヤの別名である「ツィオン（シオン、Zion）」が訛ったものという説がある。

エルサレムのシオンの丘は何度か訪れたことがあるが、イエスと十二使徒がかつて最後の晩餐を行った部屋やダビデ王の墓がある、ユダヤ人にとっては重要な土地だ。

だが、一般には祇園社という呼称は、その寺域内にあった観慶寺の別名祇園寺に因むものといわれる。

祇園というのは、古代インドのコ・サラ国の首都（舎衛城しゃえじょう）にあって、釈迦が説法した大寺である祇樹給弧独園（ぎじゅぎっこどくおん）の略である。

もしイスラエルの民が日本に渡来していたとしたら、バアル神の信仰などをもたらした可能性もあるのではないか。

イスラエルの民の間でヤーウェに対する信仰が始まる前にバアル信仰があったことは、聖書にも書かれているからだ。

こうして、京都と丹後の旅の1日目は終わった。

今日の清水寺と八坂神社はいままで何度も訪れたところでもあり、特に新たな発見はなかった。

だが、2ヶ所でおみくじが二人同じ結果が出たのは、今後の旅で起きることを予感させるようで、楽しみだ。

【聖地巡礼ファイル#252『京都に隠された十字架（後編）』へ続く】

【2003/01/12 記】

【参考文献】

- ・ 秦氏の研究 日本の文化と信仰に深く関与した渡来集団の研究、大和岩雄、大和書房、1993
- ・ 日本にあった朝鮮王国 謎の『秦王国』と古代信仰、大和岩雄、白水社、1993
- ・ 日本・ユダヤ封印の古代史 - 失われた十部族の謎、ラビ・マーヴィン・トケイヤー、徳間書店、1999
- ・ ユダヤと日本 謎の古代史、ラビ・マーヴィン・トケイヤー、産能大学出版局、1975
- ・ [ 隠された ] 十字架の国・日本 逆説の古代史、ケン・ジョセフ・シニア&ジュニア、徳間書店、2000
- ・ 大和民族はユダヤ人だった、ヨセフ・アイデルバーグ、たま出版、1984
- ・ 失われた原始キリスト教徒「秦氏」の謎、飛鳥昭雄・三神たける、学研、1998
- ・ 神々の流竄、梅原猛、集英社、1985
- ・ 日本・ユダヤ連合超大国、小石豊、光文社、1994
- ・ 諏訪神社 謎の古代史、清川理一郎、彩流社、1995
- ・ ユダヤ教の本、編集長・増田秀光、学研、1997
- ・ 図解ユダヤ社会のしくみ、滝川義人、中経出版、2001
- ・ 霊的成長と解脱、本山博、宗教心理出版、1988
- ・ The Atlas of Biblical Jerusalem, Dan Bahat, Carta, 1994
- ・ 三神たけるのお伽秦氏、三神たける、<http://kitombo.com/mikami/back.html>

#### 【アクセスデータ】

- 清水寺：  
京都市東山区清水 1 丁目 294 TEL: 075-551-1234  
拝観料：大人 300 円，小中学生 200 円  
拝観時間：通年 6:00～18:00  
京都駅から市バス 206 系統「五条坂」下車徒歩 10 分。  
京都駅から京都バス 18 系統「東山五条」下車徒歩 10 分。
- 八坂神社：  
京都市東山区祇園町北側 625 番地 TEL: 075-561-6155  
京阪電鉄・京阪四条駅より徒歩 5 分  
阪急電鉄・阪急河原町駅より徒歩 8 分  
京福電鉄嵐山線・太秦広隆寺前駅より徒歩 1 分。

- インターネットでこのページを検索した方々へ

『聖地巡礼ファイル』は、下記ページがトップページとなっており、他の作品もありますので、ぜひアクセスしてみてください。

<http://www.ne.jp/asahi/pasar/tokek/SJF/index.html>

2003 年 1 月 12 日 初版発行

2004 年 7 月 23 日 第二版発行

筆者・発行人：百瀬直也 2003-2004 Naoya Momose (C) 無断転載を禁ずる

発行所：〒187-0002 東京都小平市花小金井 6-103-13 TEL: 0424-65-5051

URL: <http://www.ne.jp/asahi/pasar/tokek/>

(Email は変更の可能性があるため敢えて書きません。上記サイトで探してください)